九一編上

へ13
3013
21

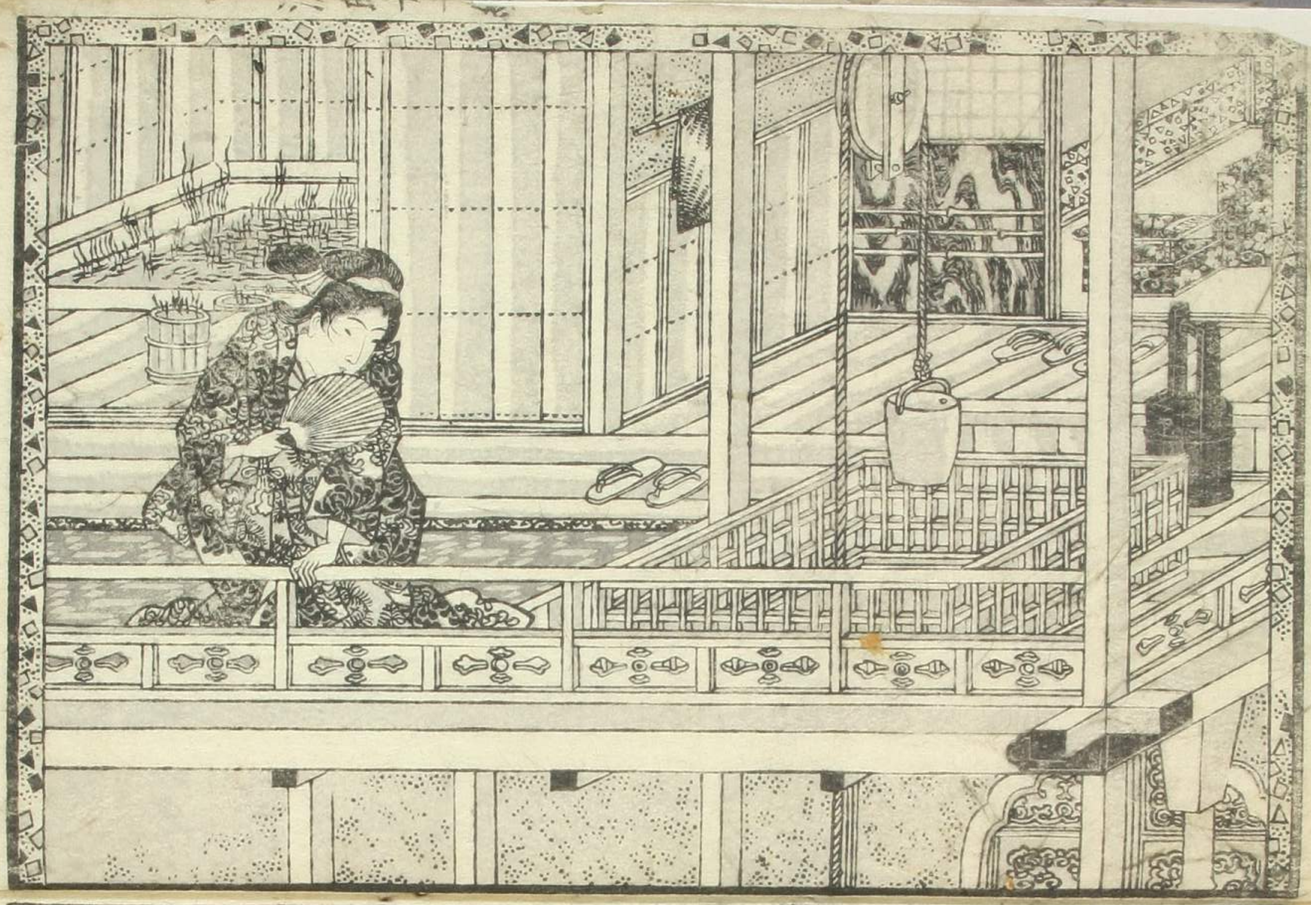
種彦作
國貞画
九一編上冊

油町
雀屋板

願ひの如く明石まさぐ立消のせぜ續きしも板元が油町でござりますとは利屈落の茶番ゆきさくきこゆれば次に店に向き合せし女清玄。夏祭りの錦繪をおし並べ。是ぞ。尼の釣舟ぞござります。海士の囀りとヤシますもおちやッぴいの事でござりませう。ト清玄尼乃繪をとつて見せ。源氏は假字冊子でござりますからひら假名をお目にかけます。ト盛衰記先陣問答の繪を出し。獨寐覚の床もこのもし。是が千鳥ぞござります梅が元にあります。ぜつと末ぐござりますが。トいひながら出しこる繪を順よくあらべ。繪合あはりう程はござりませぬといへるを九一編の序文にかへて。あるも又腰元千鳥が詞よりかぶきがりに説出せり

天保丙申正月良辰

柳亭種彦述

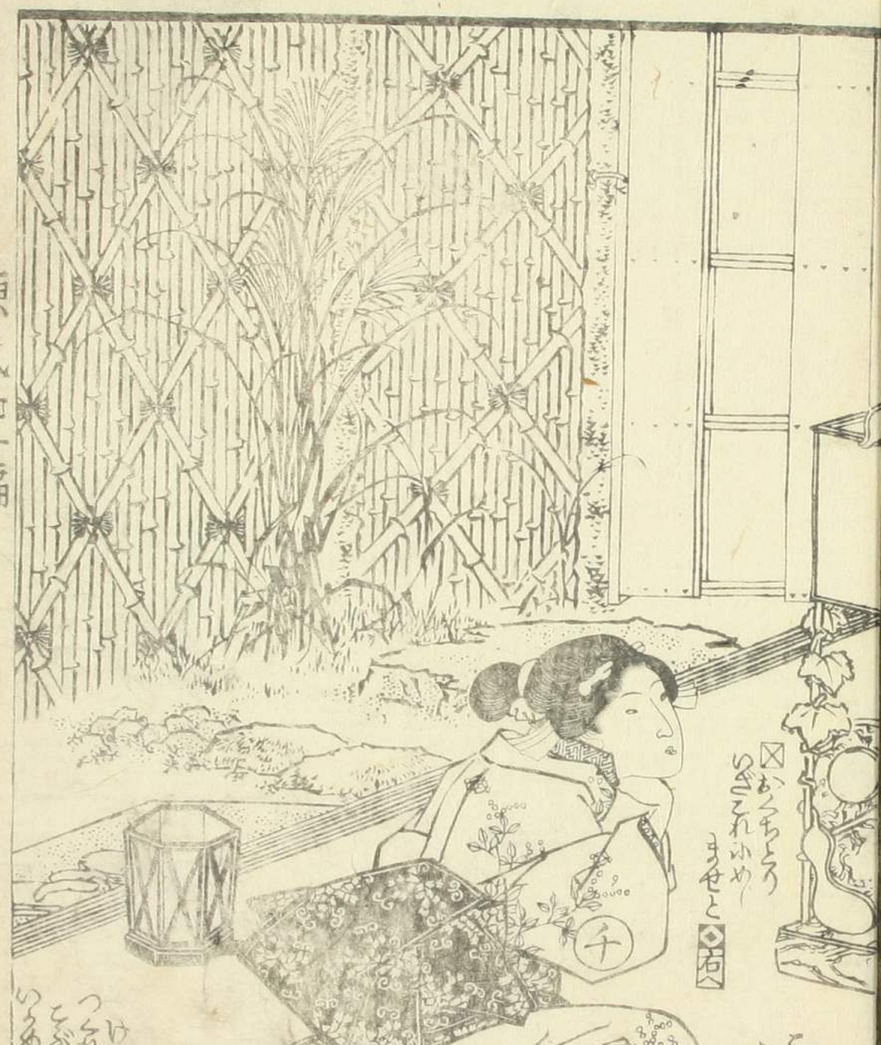


つづき
ままごとあそびのうちこうひ入るのの
だーごろのいのりの
まるーあうそれで
今うそ鉄びん
かるひー
よろうそんでるら
れどあさざうが
今のふとをり
うかうふおそせ
まるらせてるう
そぐちとんぐ
されめくむこも
えてまたぬそのそれいま
ぶのやうろうげきとせんと
をるぐのことをやりへ
いうくるくよるひるると
きこれどるさーの
むのんもさささ
つらうせろうの
めをんでうら
のちぐいーても
くらねと
めるもんそね
うそわとけを
よのそふさされる
ぶ入うの光氏きこの
おんをもむをめがうんへ
これわどでもうとみる
あんそのまるおう
仙女香
あんちらが
そめ油
義玄香
こうのう
今さうや
とごぜん
トのぐく
清水
まそ
導
ひろ
まう
せい
こく
れん
いれる
おのから
ぜ

ねんべろのくようのむこうとと
おももろうがいつまでも
せうーそのそもうちくーくこるんとこそ
あちらあるてとをかのべてあくめのくり
もそさんうとさあぐりひこされてあるこうがが
んのあちうるこふちぐうがちくさえづてきぎつる
うづたもふこのへんーそちめてむをめかせもる
びきうぶのうびできいてあこれのちきろと
ーうめとまあぐんそれんなとうひこく
りひこぐらふをきいれもーて宗入の
めーつう人男女ぐあふくつこてこぐん
ひこふるふうあんとさぐあまのびやふ
おんやうーどまちさてよき日どうこそせ
んいそひのとあれがひそふこれへもふく
人ありとてむをめかめずきせー
あそせくこひうちきもちつやく
あげさせ
るのさそ
えうびー
うけなへ
あうめん
んでー
さうぐら
しちみもかぐやく
むうふようそわそせ
こーりとちぐうをひぎりとちくくうび
よそこうふやらんうちさやのてもてんちーらせ
つまは袖をゆもろくこうれくらめこのあるおびぐ
東京七一番
ねぎこいまつこと
京橋
南傳馬町
二丁目
ろう
坂本氏ふ
かそりて
作者が
すと
記す
こそさこへよと
宗入がみまく
いざうひそのぎ
ゆりこうき
女のこのこつで
こーりこ
そきくまり
そうはも
んれんれが
あんらうめ
ありうふい
すあーて
なそのの
こくべ

◆十ノ
ゆきげしきをみやりたまふ
光氏もくちずさびたまふ
うちとけぬ
つもとよび今こまげてと
いふがくりとむまふ
のれとうんめく ☒十ノ

☒中ノ又入るもおそう夜の
月とともとどろくまでくいかんぞられん
人ふりんせをやそのかうへくらいつ
りのこりひとまもあるまじきあり
ゆるくやとうすりの
えもりをそろてひきつくろひ
さまおくつりのぐうりみ
夜ふうていでしまふ
うのぞうべのやか今まで
まそーぜーさとうれおうぜ
ひきそうれおうぜ
うまくのうちろうよう
やことくいることろ
ろう こちのわどもろ
よものうぐいすまで
ろうむうりふ
えうさされ
ありやどちいぎ
ろふやうえ まうちあま
入江のそこま
まうぐむと
まそーぜ
うことさえ公ふ
うかぶろう
月のうげ
ゆもうぐ
とうりーき



☒おうちとう
りのざれいめ
ませと ◆右ノ

人のことおりひ
いでんゆえげこの
こまろうがもくふ
ううやこへひろうえー
あもわさぬぐ
ありひつ
○さきのまふ
うけれ月ぐの
こまのつめ
とうちつぶやき
しまふ
うちふ
いづちあた
くん
ちどうり
ぜえぬ
うぐう 光氏
ひとう
どうぐの
やどれち
ぐきてそうのれぐ
つくれるさまのひと
そぶくうえのつらふ
いろあくうろそ ☒廿ノ

一の巻より
右へ
中へ
右へ
中へ
左へ
二の巻へ
つぎへ

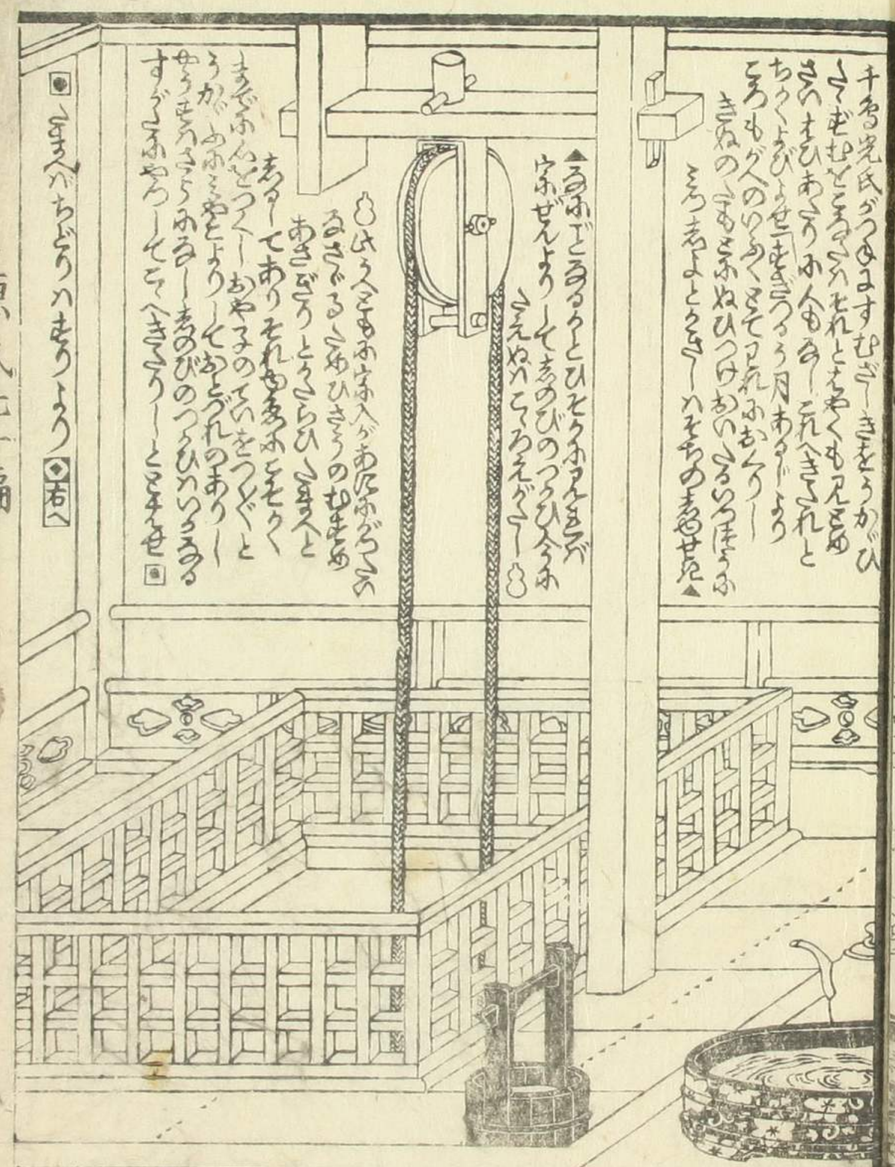
うちちりて
今までけをひ
おぶりろく
うちこそう
ろぶうふ琴と
ひまさ
ぐりろ
すぐさをそ
ひとをりさふ
あさぢりが
かれーうよ
うちせひひまあの
ろうぶろう
つひへこれふ
まさりろんど
としさぐ入ろの
さろーふのこ
きてろうーろ琴ときへをてこ
さまふかうふめと
ろをさまぐふ
のさまひて
○世のもろうなの
きんふ小板のおを
これよこきてきせよど
んふこあてめ
ぐーよのひうり
ろまんがゆて

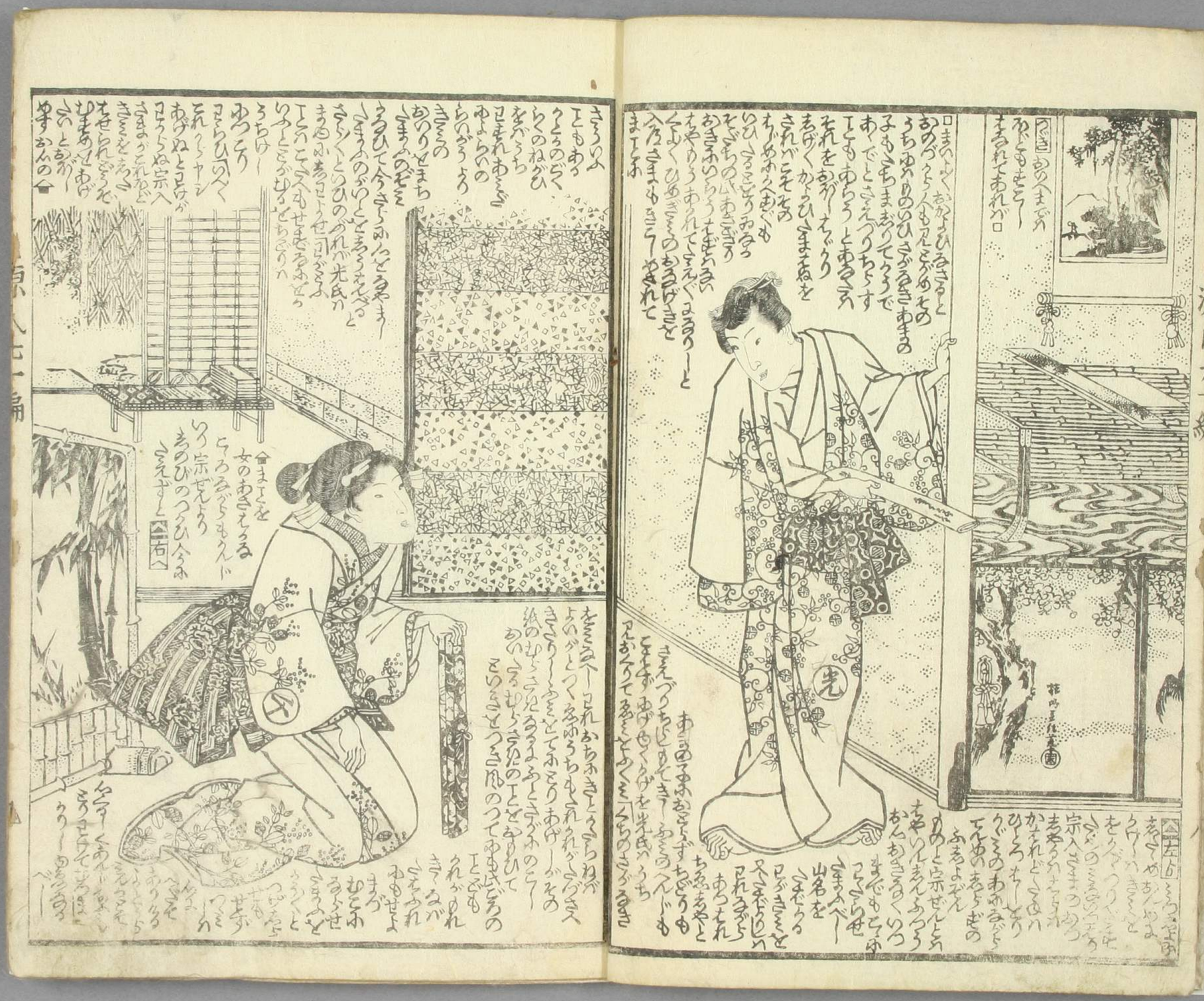
かりろおろうふのかんぢれぶおりぢーやかんふけんまれとあうぢつくせがひとくでて光氏ふ人のふをおふうーとおへあまのてふーあけさされどかんうんふ世のもろくはおようのふはくーとおさうをあれふかこち又ひーかとはろとぢふまとをわふれまひろれがまをぢさのまかえこうろざーおちうまさうすまひろう十上ノ

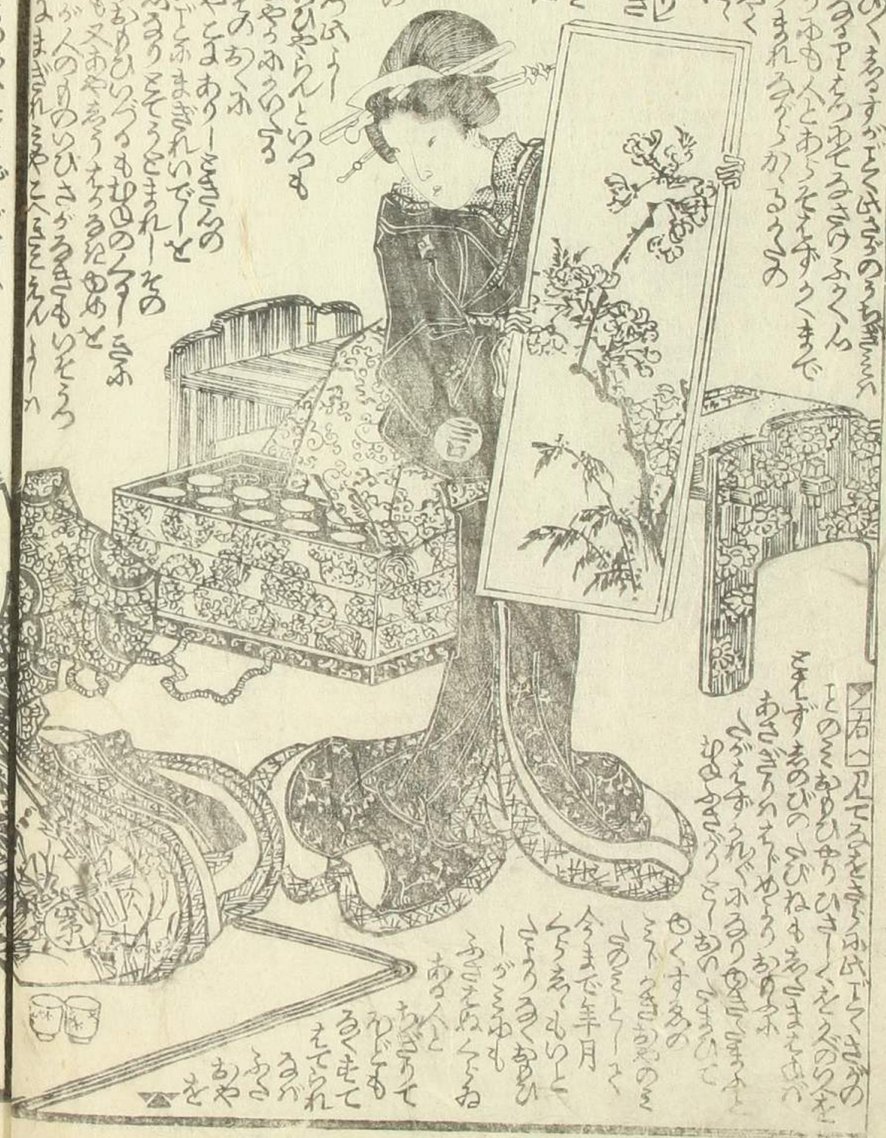
○澤月畫

名ど白くすう業程文の
能書を文程書所好ろ
筆入うりくく業ーふる
浮女中様方への状さも是
又名ど筆にされんかよろ

賣ひろめ所
本湖さて川通り二ツ目
こぐろ町四丁目
松屋おろのぎろうとヤ
浮髪の油又此







國貞画 種彦作

天保七年申春新彫

琴声女房形氣 全四冊 山東京山作 歌川國貞画

森羅萬象心意氣 全四冊 五柳亭徳升作 歌川國芳画

浮波さらし 八冊 柳亭種彦作 歌川貞秀画

烏勘左衛門忠義傳 全四冊 関亭傳笑作 歌川國芳画

稲葉山操の松枝 全四冊 宝田千町作 歌川國芳画

國字水滸傳 十四編 四冊 笠亭仙果譯 歌川國芳画

御かれの茶おしろい 美艶仙女香 四十八銅 南傳馬町三丁目西側 坂本氏制衣

しらが染くせり 黒油美玄香 四十八銅 反次 [illegible]

書物錦繪 團扇地紙 江戸通油町 問屋鶴屋喜右衛門

小數呂
曰舍
亮斗

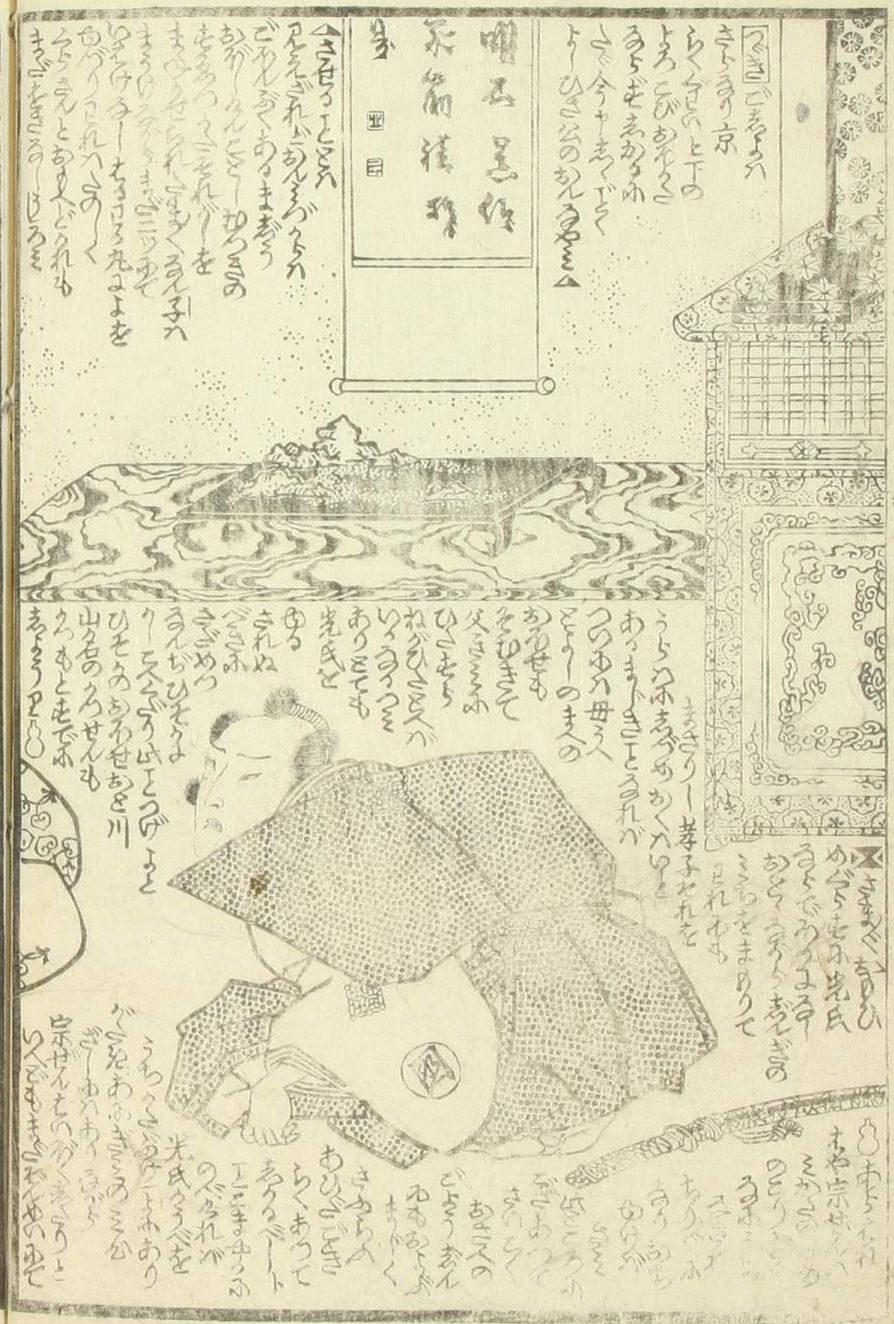
種彦作
国貞画

九一編下

偐紫田舎源氏

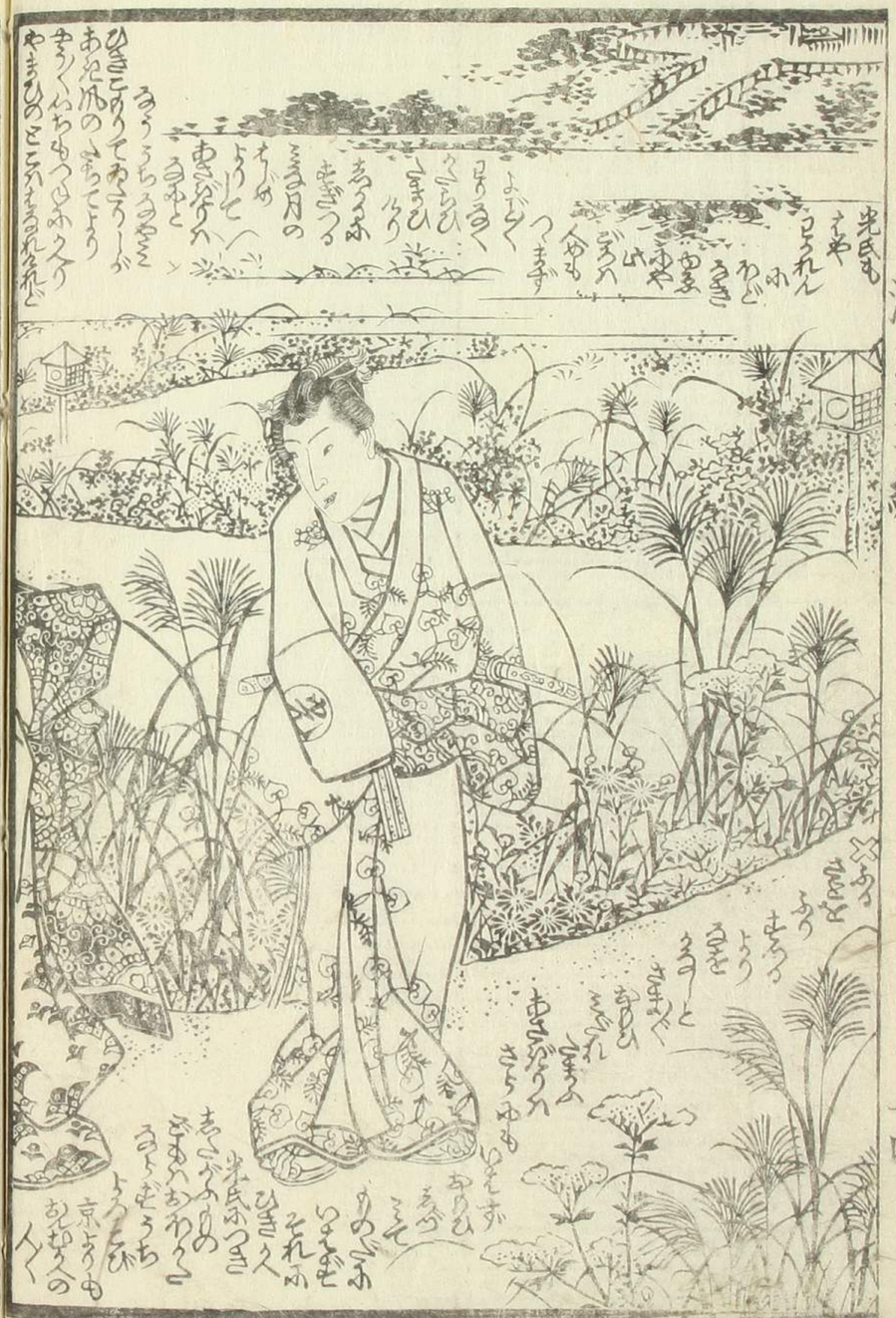
九編
十冊

仙窟堂壽梓



つぎ
さつまるところおわらせてこがたず
ひとりのくごきちめしハ
いつなるとてつくまず
いくごうりにあたらが
とゞめハせぬと
見まうす
とぞふ※
○義尚公男子をまうけ
ゆひしハおこと処の
前年の冬なり
※ちとひれふし

○下ゟ
かくてくてこゞまのこちを
とりさられしハ
そのてのを
そなへ
とゞかざるゆゑ
なれがなんぢゆ
あやまちなく
これにかくつて
おちどあり
せつぷくなさが
さまうぶんと
こられれんハ
ひつぢやうせう
ちやさく
くりて光氏もやがてさらくと
さがのやくこのちりとちらせ
おくべきなりうちつれごちて
つぎ
○右へ
○上へ



つゞき

あさぎりうへにこいそとちゝみ
○ふきつゝめてひらふとりひろきうちうちうちみ
といつもひまれなうちうちきて
エヽでもくるみおりうへぢう
光氏エあんをこゝろうちうちひ
くまふふりぐのいらくるんぐのあき
うちぎきゝゐるもうー
々れがまぎうさんこそ
光氏が京ようめもて
くぢりー琴をいそぎうへつゝそてめづらーきゝるをうと
わのうふきうちらー
しまくるみふうきき夜もすゝねうもすゝゝきゝそていちんうゝもうくうもとゝもをうんふえいふくごーうのまうまりてりのいふりめのもわうぐれがぐんの琴をあさぎりうがひきの

○まのびやふかさあそもるそのうぢひやうに上るめきてうふぢのくまうべさまふをまうべくんぐのわめのうちのいとうちくかれうちのいとうをゝそれよひられてつまおさもめうーくきてるすんこれいあくまでひうさをまーんゆくられいろ

左ノ

あふまでのくゝゝみちぐさる中の緒のまうべハエふかをもうぐらうるんつまおうのうぐうずとりゐめいうそうるゝのこ逐

右ノ

まぐみそうれぬるるんぐをおりーうさうぢどあーてひさゝーうさのこうおりくおもゝんとのうぢおうくねのうみ光氏おもくまでまとまうるぐが四月ごろおーそもをよりまーきくぐさりのをとひとくをうさーうふりてこれもうさの光ぢうそ

左ノ

おさうくおりゝまひ「おんさん父おうさうひるぐうかくうてをの師さもようーおくうとさうつゆおありーくおりおりーうどゝふまでさとふさうせあをくもぐくもううとうさうがかうさゝふひとおとうりうときうせうさんとをゝめられおさぎうりのうぐうりーさふそめうもうるうさゝぐんおうそうゝとふ右の琴ゝもわれがそれゝつけてもゝおりひなる又のおゝせへるぐりのそふ仏多ハひろもてられてのそこをるゝぢうぐれがりつうかそさんまうのこんとこもはゝぐうてゝしうさゝおをせつゝおそごゑよ「るびのおうさうのひうさおとゝなふのおさをるぐんゝおやくそおうくゝもゝんでの二重のおびめぐうあふのをうのーゝめゐるへてあうーのを

右ノ

ゐぐうりをゝくかゞれのふぢうるゝゝもおぐくおとうねおさぎうふぐるゝおもとおりひーがヌめぐうおひうさゝおそをるまゝそれまぐのかくゝゝゆとおへくまうあいちうぢもゝさうをやぐーそのえへよ今うおうぐさうつまおとをおうぐまれとうてゝまうひいふくられをうをそぐくおりひーゆえるるうふのうぎうもくかをうぬとうぐりのエとるんどるをこうぐくとうさゝもふくゝゝーうれんおさぎうふぐうれんゝまゝをやくうおりつ

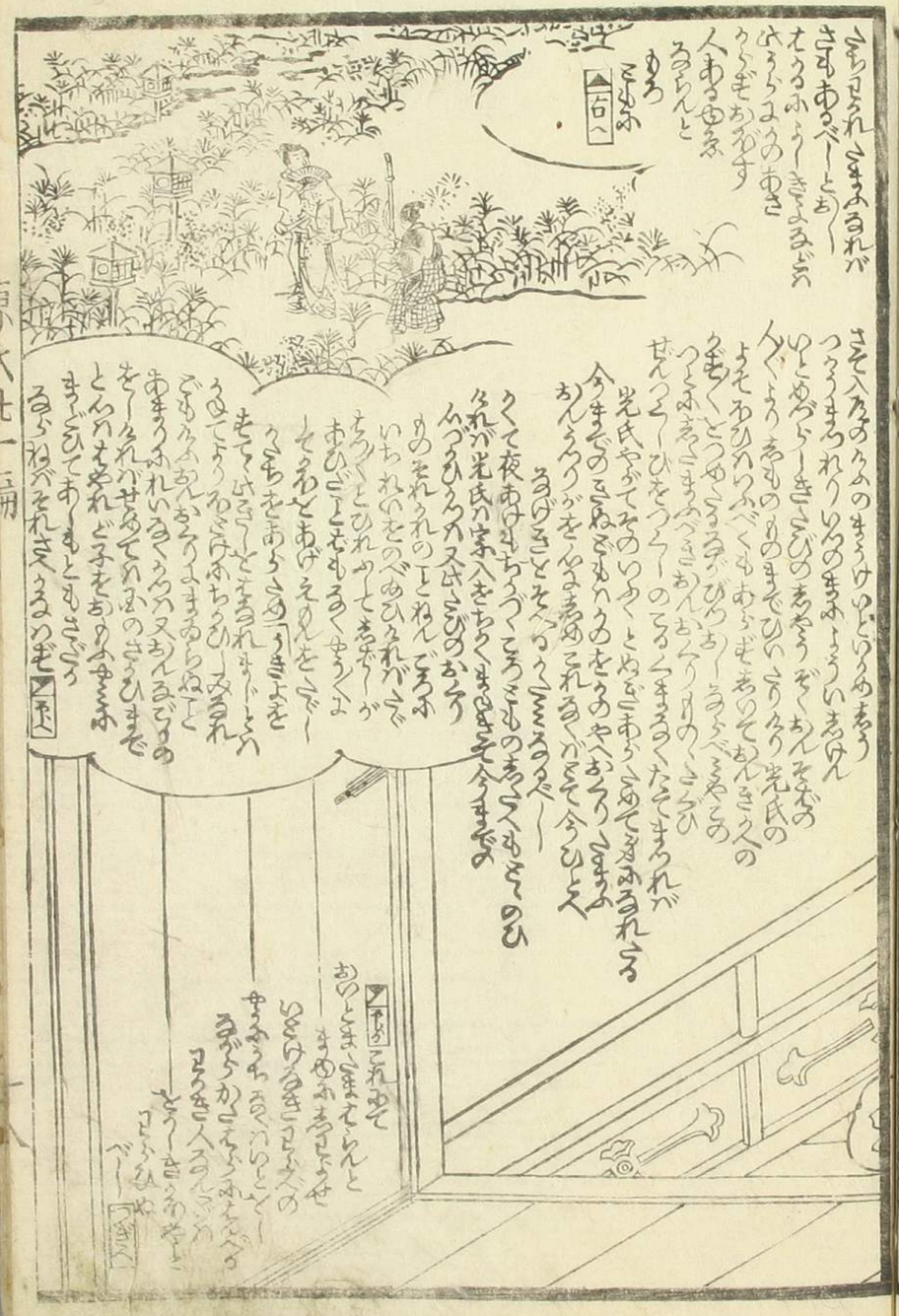
ゆを

左ノ

「そのつまどうおさおおるうれてひさうるゝおひぐふうぐゝまぞりちぐうゝをやえうるうさまうぐのるぐさおゝもとおりひ

ありおぐのごひうれ

△ゝうちぢうとうくふさもるきゝ光氏をてうちうくゝ又もうめぐう



十九

種彦作 國貞画

つぐき

くべきねけのせうふ
ゐりつてこれもいざさず
こそとよりはやうちゐて宗全はやらびを
ねはられその子三郎むはきよりからめとられし
ゐんぞいふちうまんあれども天だう
ゐてこもあらんとてみくゐも
とゞめずひりは一日ねて
くらしよりはかへつて
さらにねぶらぜ光氏
ぎことむまめのことに
うちかりておとるひ
ひさしくせきれがむべの
ゆくへもしらぬまりしとるとおしまり
ひこまら
ゐとけを
をがむさま
きゆうきゐ
ゐされがさむらひ
どもはいさゐらまて
月夜にいでき
おとるひようちめ
こをれいりていれかぞ
たげしくせこふ
ものにまぎれ

浄書千形道友

天保七年申春新彫

琴声女房形氣 全四冊	山東京山作 歌川國貞画
森羅萬象心意氣 全四冊	五柳亭徳弁作 歌川國芳画
浮波さりし 八冊	柳亭種彦作 歌川貞秀画
烏勘左衛門忠義傳 全四冊	関亭傳笑作 歌川國芳画
稲葉山操の松枝 全四冊	宝田千町作 歌川國芳画
國字水滸傳 十四編 四冊	笠亭仙果譯 歌川國芳画

御かれの茶おしろい
美艶仙女香 四十八朔
しらが染くすり
黒油美玄香 四十八朔
南傳馬町三丁目西側 坂本氏制衣
反次 [illegible]

書物錦繪
團扇地紙
江戸通油町
問屋鶴屋喜右衛門